

余謂く。兼好歌の意を推ていはば、他人しらぬならば穿踰の盜をも安んじぬべき心と聞えぬ。徒然草を見候ては、見識も有之僧の様に見えて、實はかかる人品實に可疾惡焉。

一、君子は本を務む

本論一篇與^ニ九里祥甫。

愚竊謂く。凡天下の事都て本なきことはなし。其本をさへ能く理會すれば、枝葉の事は自然に其宜きを得る者なり。是を草木に譬るに、草木は逆生にして、首は却て下に在て根なり。根は其本なり。本堅固なれば暑寒の烈しきに逢ても、不痛不傷枝を低れ葉を敷く。其本を得れば也。抑天下の人は上は天子より下は庶人に至るまで、日用彝倫の上に就て、其事業種々品々ある内に、學問して古を考へ今に通するより、最上なることはなし。是其本の有所なれば也。然るに其學問には別して本あり。其本を得れば枝葉の事は、自然に明らめ得易し。蓋し四書・六經は其本也。夫れ六經は上古の聖人君となり師となつて、天下國家を治安せしむる事業なれば、是を以て本とすべきども、却て其大本は四書にあり。四書に亦本あり。大學是也。何んとなれば上古より聖

するの教なり。されば詩文章を惡しき事と云にはあらねども、末流の弊に至ては甚き害を貽す事和漢に昭たり。陳の簡文帝・宗の徽宗帝の如き、詩歌管絃のみにして日月を送り、太平の様に思はれしに皆國を失ひ、身も夷狄の囚となつて、天下後世の笑となれり。されば本朝にしては神武帝以来、文武の業にのみ志して政務ありし時は、千歳を経て天下治平なりしに、宇多・延喜等以來は、専ら詩歌管絃のみを朝廷の風雅として、君も臣も唯詩歌のみに耽り、世の嘆き民の愁へも不顧、是を以て高致として文武の業をば可講ともせず、終には北條如き倍臣に天下を奪はるゝに至りぬ。詩歌管絃の祟りを成すと云べし。詩歌も能く用れば政事の助ともなり、性情をも養ふべし。都て其本を失へば必ず其害を得ること、獨り詩歌のみには非ず。且人君たる人の學問は、別て大體のあることにて、儒生等の業とは特に異り。同じく文學といへども、僅にも其門戸の入所違へば、末には大なる謬ともなる故に、古人の諺にも違之毫釐謬以千里といへり。而して入門の要は大學、其次は中庸にして聖學の闇奥こゝに盡たり。其上には易・春秋・詩・書・禮・

徳あつて君師となれる人は、伏羲・神農・黃帝・堯舜・禹湯・文武及周公此十人也。聖々相承て宣ひ傳へし要道を、孔子に至て初て大學の書に載せられたり。是を以て數千百歲後の書なれども、四書を以て六經よりも本とするは爲此也。朱子の語にも四書さへ能く修れば、六經は不修して通ずるともいへり。四書の中にも大學を本とするは、天下國家を治平するの具なれば也。天下を平かにするに本あり。國なり。國を治むるに本あり。家なり。家を齊るに本あり。身なり。身を脩るに本あり。心なり。心を正しうするに本あり。意念を誠にするなり。意念を誠にするに本あり。知識を明かにするなり。知識を明かにするに本あり。道理を窮るなり。道理を窮ることは致知格物の工夫なり。如是萬事萬物に就て、其本を致むるを學問の要務とす。然るに當代學問といへば、五倫・五常の名儀をも不辨中に、先詩文章にのみ心力を用ひて、聖賢の事業をば度外の物に成し來れり。夫れ文者我人辭を相通するの器ものなれば、簡要の物なり。それさへ文を論じて辭は達して止むとて、強て文藻を事とするに非す。徳あれば必ず文あり。詩は情性を吟詠を事とするに非す。徳あれば必ず文あり。詩は情性を吟詠

樂の六經にして事足り、歴代の事蹟は通鑑及紀傳の書に備りぬ。此外の書は不必看可也。某歐陽公の本論を讀に、其佛老を排斥することは誠に無餘論。而るに本の本たることには不及。某が本論名は同じといへども意は異なり。蓋天地の大なりといへども其本あり。大極是也。是故に大極の義を明らめ得ば、天地の妙用も掌に指すが如し。况やそれより下なる物をや。孔子曰。君子は務本、本立て道生と。凡事根本既に立てば、諸道の生じ來ること、草木の根柢既に立て枝葉の繁榮するが如し。一つの生の字眼目緊要なり。何ぞ本を務めざるや。

寛保二年壬戌林鐘上浣

一、武州押立村長五郎の至孝

寛保元年武州多摩郡府中領押立村御代官上坂安左衛門支配所小民長五郎といふもの、今年八十八歳に成候老母を養ひ候。其業は薪を商ひ渡世とす。近年妻を失ひ寡居いたし、十四歳以下の小兒三人有之候。長五郎以前は譲の田畠も有之、召使の奴婢も有之候處、家衰へ朝夕の暮しも絶々に成候。老母是を悲み氣の毒に思ひけり。長五郎母へしらさ